2021 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	田中雅一
研究テーマ	メモリアル・ファッションの文化人類学的研究

＜助成研究の要旨＞

メモリアル・ファッションとは、生前その衣服を着用していた人物や、彼/彼女に死をもたらした出来事の記憶（メモリー）を想起する媒体（メディア）としての衣服（カツラ、装飾品、義肢などに拡大することも可能である）を意味する。衣服は、防護や防寒などの機能だけでなく、それを着る人の社会的な地位や属性（男女、世代、エスニシティ、職業、階層など）を示す記号としての役割を有する。後者の典型は民族衣装や制服である。さらに今日では、衣服は個性を表す手段（おしゃれのアイテム）としても重要性をましている。しかし、メモリアル・ファッションは単純な記号ではない。なぜなら、メモリアル・ファッションは、着る人の地位や属性を示すというより、故人との繋がりの記憶に関係するからである。その繋がりは、衣服自体が持つ記号としての意味作用ではなく、故人が愛用していたという経験に求められる。衣服は、追悼や弔いという文脈でも重要な役割を果たしてきたが、これまで十分に議論されてきたとは言えない。ここに本研究の意義がある。

本研究の目的は二つある。第一の目的は、現代日本社会におけるメモリアル・ファッションの役割を探究することである。その際、自然災害の被災者や戦争の被害者、さらにハンセン病患者が残した衣服とその保存・展示の実態をフィールドワークを通じて明らかにする。本研究のタイトルにある文化人類学的研究とはこのフィールドワークという方法に関わる。第二の目的は、身近な存在の遺品としての衣服についての人々の態度を調べることである。これについては小規模なアンケート調査を実施した。

アンケート調査で興味深かったのは、「亡くなった方が残された衣服・アクセサリー・カバン・靴を、ご自身が着たい、身につけようと思うことはありますか？」という問いに対し、回答者 18 人のうち 16 人が「はい」と答え、その理由を尋ねたところ（複数回答可）、故人を忘れない・思い出を振り返る(5 人)、故人を感じられる・自分を守ってくれる気がする(4 人)、故人の思い出を身に着けたい(2 人)、思い出の品である(1 人)、故人が大事な人だった(1 人)、故人から譲ると言われた(1 人)、といった、故人を理由にする回答の他、その衣服などのデザインがよい(4 人)というように、遺品を古着のような感覚で捉えている回答もあった。このアンケートに関連して、葬儀会社でインタビューを行ったところ、大規模な葬儀ではメモリアル・コーナーを設置し故人が愛用していた衣服や品物を展示するという傾向が少しずつ広がっているという。

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターと同じく、東日本大震災の関連施設においても衣服を展示している施設は皆無であった。例外は津波復興祈念資料館閑上の記憶で、亡くなった中学生が所属していたクラブの制服が展示されていた。また、気仙沼在住のアーティスト、ちばふみ枝氏は、亡くなったお祖母さんの遺した大量の衣服を写真に収め個展をひらくという活動を行なっていた。どちらも個人的な思いが強い活動という意味で、東日本大震災の関連施設の活動と性格が異なる。こう考えると、衣服の保存や展示には、故人との個人的な繋がりが重要な意味を持っていると推察できる。

ハンセン病施設の収容者たちのほとんどは、家族から縁を切られ、隔離施設で一生を過ごすことになる。このため、患者たちの遺品は、遺族に引き取られることもなく施設に保存され、後に展示施設などで公開される。

広島平和記念資料館には多くの衣服が収蔵、展示されている。他方、沖縄県立平和祈念資料館や那覇市立博物館には、戦災やその後の混乱で消失したこともあって当時の衣服はほとんど所蔵されていない。例外は、1944 年 8 月米軍潜水艦によって撃沈された対馬丸に乗船していて、犠牲になった小学生たちを追悼する対馬丸記念館である。ここには、ランドセル、着物、学生服、帽子、寝間着などの遺品が展示されている。

被災地や戦争に関わる博物館やハンセン病関連施設に展示されている衣装は、それぞれ特定の震災や戦争、さらに病気といった「大きな物語」を前提としている。これに、「小さな物語」が加わると、衣服の意味がより個別化され、具体的な個人の人生と結びつき見る人の印象に残る。衣服は、より個人的で、材質上耐久性も低いため展示品としては一般的ではないが、血痕がついた衣服は戦争の生々しさを喚起する優れた媒体となる。さらに、たくさんの衣服を集めることによって匿名性や集合性が生まれ、原爆被害に見る近代戦争の悲惨さを喚起することが可能となる。衣服はきわめて可塑的な記憶媒体であることが明らかになった。